日本中国語学会々報　2014年12月

http://www.chilin.jp/

◆目次◆

ご挨拶　太田斎（会長）……1
2014 年度全国大会総括……2
2014 年度学会奨励賞の選考経緯……4
支部例会実施報告　2014.6 - 2014.12……5
会則・内規改正のお知らせ……12
会議報告……13
例会および全国大会開催のお知らせ……18
事務局からのお知らせ……19

ご挨拶

太田斎（会長）

『夕鶴』のつうが自らの羽を抜いて機を織る姿は、自己犠牲的な内助の功ということでしょうが、それだけを取り上げれば、芸術家が自らの生命の一部を代償に作品を生み出すことの比喩ともとれます。研究書や論文の執筆は、それほどまで壮絶ではないでしょうが、生み出されたものが自己同一性追求の結晶という点では芸術の創作活動と似たところがあります。ただ日々の雑用に追われつつも、絶え間なく研究業績を出さねば身分の保証が失われるというような状況では、それが安易に堕してしまうこともあるでしょう。昨今の一部の大学や研究所で起きたデータ捏造、論文盗用の問題はそんなところに端を発しているのかも知れません。ただ、だからといって研究のプロにそれが許されるはずはありません。

独創的な研究に必要なのは確たる方法論と先行研究の把握であることは言を俟ちませんが、そのバランスは危ういものです。完成された方法論を用いるなら、テーマが同じなら誰がやっても結論は同じにならねばいけません。極論すれば、そこには如何に新奇なテーマを見つけるかという事でしか研究の個性を発揮できません。他方、知識の吸収は既成の価値観を吸収することにもなりますから、先行研究について博識になればなるほど、それに縛られてアンビシャスな研究が困難になる虞が出て来ます。

ジリエロンは地質学から方言地理学を考案したのだとか。理論物理学者が大乗仏教に没頭したという話も耳にしたことがあります。知のパラダイムシフトには当面の学問とは全く違うところにヒントが隠されているのでしょう。もちろん、全く関係ない学問分野の方法に新たな方法論の可能性を見出すのには天才が必要でしょうが。

一般論ですが、若い方は年寄りに比べると、知識（＝しがらみ）が不足している分、新た

な発想には有利です。若者は良い意味で生意気であるべきです。一方、年寄り（私のことです）は逆に知識と従来の方法に安住して、小手先で論文を書くことに堕し、知的冒険には臆病になっています。誰もがピカソのように、過去の成功を惜しげも無く捨てて新たな挑戦をし続けるというようなことは出来そうもありませんが、その気概だけは心に刻んでおきたいものです。

わが日本中国語学会は親睦団体です。一部の不届きな人間がいたとして、その人間によって冒頭に取り上げたような問題に直面するようなことが起きないよう、切に願っています。事が起きると、その度に防止策が設けられ、融通性が無くなって、親睦団体であることから逸脱していきます。今後、この学会が研究活動の交流に快適な場であり続けるための最も肝要な条件は、我々が以上に述べたような意識を持って、自らを律することだと思っています。

2014 年度全国大会総括

Ⅰ．今年度大会総括

第 64 回全国大会は、大阪大学豊中キャンパス（大阪府豊中市）を会場として、11 月 15 日（土）16 日（日）に開催された。

（1）参加者数

参加者総数は 365 名、うち一般参加者が 322 名、招待者 8 名、書籍等の展示関係者 35 名である。

（2）総評

今年の全国大会は、例年より約 3 週間遅い 11 月中旬の開催となったが、天候にも恵まれ、爽やかな秋日和の中、大勢の出席者が集った。議事運営や各会場サポートともに、開催校の大阪大学には、周到で心のこもった準備をしていただき、有意義な 2 日間であった。

初日の北京大学袁毓林教授の講演「汉语意合语法的认知机制和描写体系」は、中国語の文法構造の一特徴である「意合法（parataxis）」について、何を以てそう名付けるかを唐詩から論じ、さらには大脳生理学や心理学の実験結果なども駆使しつつ、まさに縦横無尽に論を展開された。講演後には多くの質問が飛び交う刺激的な講演であった。

実施 3 年目を迎えたワークショップは、今年度は実に 4 グループが 4 会場に分かれ、セッションを行った。

第一会場では、下地早智子会員の企画になる「日本語と中国語における話し手の見え方:「視点」に関する日中対照研究」が行われ、日本語教育専門家の奥川育子氏、杉村博文会員、下地早智子会員、井上優会員の 4 名がそれぞれ報告を行い、認知言語学研究における「視点」の観点を、中国語文法の分析に応用する可能性について論じた。コメントは認知言語学者の本多啓氏により行われ、大勢の聴衆とともに活発な議論が繰り広げられた。第二会場は、竹越美奈子会員の企画、小嶋美由紀会員、西村英希会員、野田寛達会員の発表による「方言データを活用した語法研究の可能性」であった。若手研究者による新しい理論研究の紹介に重点を置いたもので、日本ではまだ馴染みの少ない「意味地図理論」の紹介（野田会員）は、同理論の可能性と問題点を指摘し、興味深いものであった。第三会場では、遠藤光暁会員の企画による「亚洲声调

面面观」が行われ、八木堅二会員、中西裕樹会員、チベット語学の者鈴木博之氏、ベトナム語学の近藤美佳氏によって、各々自身のフィールドワークに基づいた最新成果が報告された。中国のみならず東アジアにおける声調の位置づけと変化過程について、聴衆からの問題提起を含めて活発な議論が展開された。第四会場は、望月圭子会員による「汉语学习者语料库的建构与中介语的研究」で、北京大学袁毓林氏、望月圭子会員・申亜敏会員、于康会員、砂岡和子会員・北京大学桂孟秋氏、台湾師範大学陳浩然氏・同張莉萍氏による報告が行われた。本研究は、北京大学・台湾師範大学・早稲田大学・関西学院大学・東京外国語大学が連携して実施中の中国語学習者コーパス構築及び誤用研究についての成果報告であり、学習者の母語に根ざした中国語教育のあり方についてフロアとの間で熱心な議論が行われた。

ポスターセッションは、昨年に引き続き、2日目昼の時間帯に実施された。各ブースにおいて活発な意見交流が行われる様子から、この企画が軌道に乗りつつあるのを実感すると同時に、プレゼンテーションに慣れた発表者とそうでない者との間で、意見交流に一定の相違が生じる実態も観察された。今後、本企画のさらなる成熟を期待したい。なお、ポスターセッション発表予定者の 1 人がやむを得ない事情で欠席された以外は、各分科会を含め、全ての日程が滞りなく実施された。

今大会を大過なく終えることができたのは、ひとえに開催校である大阪大学の諸会員及び多くのスタッフの尽力の賜物であり、特に、各会場から懇親会に到るまで、学生スタッフの機敏で的確な働きぶりは特筆に値するものであった。この場を借りて厚く御礼を申し上げる。

（3）改善点・反省点

今回は、昨年まで散見した予稿集原稿提出に関わっての遅延なども見られず、応募受付やプログラム編成ともども、順調に進展した。

分科会発表においても、予稿集の内容と甚だしい乖離を見せる発表は報告されておらず、これまでの注意喚起が一定の功を奏しつつあることに、委員会としては安堵している。

開催 3 年目のワークショップも軌道に乗りつつある。応募企画の増加は嬉しいことであるが、それに伴い、「約 4 名」による 1 人当たり「20 分を超えない発表」という規定の拡大解釈による実施事例が、昨年に引き続き生じている。現状を踏まえてどのようにスムーズに運営していくか、新たに発足した委員会の課題の一つとしたい。

Ⅱ. 来年度の全国大会にむけて

（1）来年度の第 65 回全国大会は、東京大学駒場キャンパスで、10 月 31 日（土）、11 月 1 日（日）に開催する。

（2）来年度も初日の企画は招待講演 1 本＋ワークショップとし、二日目に分科会発表及びポスターセッションを行うという方針で臨みたい。ワークショップは企画者・発表者間の緊密な連携と入念な準備が必要となるため、応募時期は一般の発表申込よりも早く、2015 年 4 月 1 日（水）より 4 月 30 日（木）までとする。詳細については 2014 年 12 月末までに学会ウェブサイトに応募要項を掲載するので参照されたい。

（3）来年度も、一般発表の応募要項はウェブサイトでの告知のみとする。4 月初旬頃までに学会ウェブサイトに掲載されるので、その要領に沿って応募されたい。

(4) 今大会では、本学会初めての試みとして、大会期間中に「託児室」を設けることとした。開催校である大阪大学の「臨時託児室設置支援事業」の支援も受け、利用希望者を募ったところ、結果的に申込者はなく実際の開室には至らなかったが、今回の試みにより実施上の一定のノウハウを蓄積することはできた。言うまでもなく、学会としてこのような体制作りとその維持は重要であり、今後の大会でも継続して実施していけるよう、大会運営委員会では開催校との連携を密にしていきたいと考えている。

(5) 開催準備及び大会運営に関しては、今年度の経験をふまえて改善を進めたい。今後も簡素化を図って開催校の負担を減らしていく方針であり、引き続き参加者のご理解とご協力をお願いする次第である。

(大会運営委員会)

2014 年度学会奨励賞の選考経緯

編集委員会では、2014 年 3 月の第 1 回編集委員会において、『中国語学』260 号に掲載された論文の中から学会奨励賞の選考対象とする論文 3 本を選出し、さらに 5 月に開かれた第 2 回編集委員会において、選考対象論文 3 本について慎重な協議を行なった結果、以下の 2 論文を 2014 年度の学会奨励賞受賞論文の候補とすることに決定し、この案が理事会において承認されました。

学会奨励賞受賞論文
1）陳怡君氏（金沢大学大学院）
漢語南方方言指示代詞發展趨向試析
——從地理分布及語法化角度的觀察
2）蕭振豪氏（京都大学大学院）
“轻清重浊”重议：以诗律为中心

【選考の経緯】

1）陳怡君氏論文

本論文は、中国南部の漢語方言の指示詞について、言語地理学・漢語史・文法化研究等の知見をふまえて、その形成の諸相を論じたものである。比較的均一な北方方言の指示詞に比べ、南方方言の指示詞は非常に複雑な様相を見せるが、これを声母の音声形式の地理分布に基づいて整理することによって、語形の歴史的先後関係を明らかにし、さらに文献資料によってそれを裏付けている。同時に、量詞や数詞が指示詞として使われるという南方方言に特徴的な文法化現象が発生するメカニズムや、この現象が引き起こした音韻変化についても論じている。

本論文は、卓越した分析方法により南方方言の指示詞の複雑な分布の特徴を可視化し、そこから実証的で明快な結論を導いていること、膨大な量の先行研究や過去に発表されている同分野の方言地図もよく参照した上で、説得力のある独自の論を展開していることが評価された。その結果、編集委員会全会一致で奨励賞受賞論文として推薦し、理事会で承認された。

なお、審査段階では、一部の語形グループの歴史的先後関係についての論述が十分ではないことが指摘されたが、本論文のように広範囲にわたる方言を扱っている場合、すべての語形の変化の詳細を記述することは、学会誌論文のボリューム上いささか制約があるとも考えられる。こういった点については、今後、さらに精密な研究を進めていかれることを期待したい。

２）蕭振豪氏論文

本論文は、韻律論における「軽清重濁」という概念の指す内実を論じたものである。先行研究の論点を整理した上で、『文鏡秘府論』における三箇所の記載に着目し、当該の条文の精読と詩歌の実例への適用を踏まえ、「軽重」は声母に関する概念であり声帯振動の有無などを表現したもの、「清濁」は韻母に関する概念であり介音の相違などを表現したものとする説を提出し、併せて「通韻」「落韻」などの関連する概念についても論じている。

本論文は、中心とすべき資料を精選し、条文の内容を丹念に解読することにより明確な結論を得ることに成功していること、そしてその解読が韻律論や等韻学についての深い知識に裏打ちされていること、さらに論証に際して梵語や梵字に関する知識が必要な悉曇資料をも有効に活用していることが評価された。その結果、編集委員会全会一致で奨励賞受賞論文として推薦し、理事会で承認された。

審査段階では、本論文の結論はすべての文献の「軽重」「清濁」に適用し得るものではなく、他資料における一見矛盾する記載を如何に解釈するかという論述が必ずしも十分ではないこと、また、論文の表現面では図表による図示の仕方に難があることなどが指摘された。しかしながら、前者は紙幅の都合という面もあり、後者は本論文の価値を大きく損なうものではないと判断される。今後の研究のさらなる進展を期待したい。

（編集委員会）

支部例会実施報告　2014.6 - 2014.12

◆関東支部例会

◇2014 年 6 月 21 日（土）日本大学

・町田茂（山梨大学）：情報機能に主眼を置いた文法記述の可能性

現代中国語の文法記述に重要な要素として、従来、有界・無界の区別、アスペクトの存在（時制の存在の否定）、量詞の個体化機能、流水句の存在などが提示され、いずれも相当の説明能力を有することが実証されてきた。しかし、これらは事実のある面を切り取っているものの、いくつかの文法現象の発生を予期することができない。本発表では、中国語における一連の形式上の対立を情報機能からとらえ直し、従来アスペクトと呼ばれてきた要素や補語・重ね型、語気助詞等を再分類するとともに、連動構造・多動詞文・副詞が作り出す環境の重要性も考察する。

・神野智久（大東文化大学・院）：「とりはずし」を表す中国語について―連語論の視点から―

これまで、「～に～をとりつける」に対応する中国語表現とそれに関連する構造は、“V 在 L”や“在 L＋V”の分析を中心に、多くの研究（cf. 丸尾誠 2005、金立鑫 2000、邵洪亮 2000、王还 1957、朱德熙 1999etc.）によって明らかにされ、連語論の角度からの研究も少なくない（cf. 方美麗 2004a, b、呉大綱 1996, 2005etc）。しかし、その反対の出来事を表す「～から～をとりはずす」（連語論のいう「とりはずしのむすびつき」）に対応する中国語表現はあまり深く掘り下げてこられなかった。本発表では、連語論の視点から「とりはずし」を表す中国語の表現を記述し、関連する問題を解決する。

◇2014 年 7 月 19 日（土）慶應義塾大学

・大野広之（慶應義塾大学・非）：『大藏全咒』

にみられる観音菩薩真言陀羅尼についての一考察

本発表では、観音菩薩に関する真言陀羅尼についての考察を主たる内容とする。日本の十三仏信仰で読誦されるものを端緒としつつ、チベット仏教で一般に知られる六字真言についても併せて見検討したい。中国語圏では、観世音菩薩（新訳は「観自在菩薩」と表記する）を安置した寺院や民間信仰の光景を目にすることが多いが、『大藏全咒』所収の真言陀羅尼のうち、満漢二体による対音表記についての特徴は如何なるものかを考えていくこととしたい。

・藤田拓海（二松学舎大学・院）:『切韻』残巻における踊り字「ゝ」の再検討―「也」と解釈することについて―

『切韻』残巻の注文には、踊り字「ゝ」が見られ、正文（見出し字)、あるいは注文における直前の字の代わりとして用いられている。しかしその中には、踊り字として解釈することの難しい例もいくつか存在する。そこで本発表では、従来踊り字と見なされてきたものについて、その一部を「也」字として解釈することについての検討を行う（これには「ゝ」に似た「也」字の略形が日本の古写本に見られることも参考となろう)。この解釈は、『切韻』諸本間における注文の異同を説明する上でも有効であると思われる。

・李麗萍（東北大学・院）：他動詞を項に持つ新型受動構文「被+X $_{他動詞}$」に関する研究―通常の受動構文「被+V $_{他動詞}$」との区別を中心に―

本稿は実例のデータを使い、現代中国語における新型受動構文「被＋X $_{他動詞}$」を通常の受動構文「被＋V $_{他動詞}$」と比較し、その意味的、形態・構造的及び語用論的特徴によって両者を区別する方法を検証した。新型受動構文と認められるのは以下の場合である。(1)「NP1＋被＋他動詞」の NP1 が他動詞の動作主体である。(2)「NP1＋被＋他動詞」の NP1 が他動詞の動作対象である場合、話者の否定的判断がある。また、引用符がつく、および婉曲的に話者の批判的態度を表すという二つの特徴についてもその典型性を検証した。

◇2014 年 10 月 25 日（土）大東文化大学

・李鵬（大東文化大学・院）：中国語における結果を表す動補構造の生成過程

本文试图论证，由前项动词和后项动词组成的汉语结果复合动词的生成过程是由前项动词的非宾格性决定的。如果其为非宾格性动词，其生成过程是按照 raising-construction 的结构；如果其为非作格动词或者是及物动词，其生成过程则是按照 control-construction 的结构来完成。本文着重利用生成语法在日语研究的研究成果，即长谷川信子 1999 和影山太郎 1993，对先行研究进行分析后认为，汉语当中存在着同样的生成过程。

・星健一（中央大学・非）：略語構成における序数の位置決定の過程が二段階からなることについて

略語の中には“第一实验小学”を原形とする“实验一小”など構成過程で序数が移動する例がある。ここから，略語構成過程は，字の残留と消去の選択，及び，序数の位置を決定する過程からなると考えられる。そこで後者を考察すると，略語の序数の位置を決定する過程は，まず序数の前方への移動が生じ，次いで後方への移動が生じうるという，二段階からなるものであると考えられる。この見解自体はすでに本学会関東支部例会をはじめとする口頭発表で何度か述べてきたが，質疑応答では二段階であることの妥当性に関する疑義や反論が毎回寄せられた。今回は，略語構成過程における序数の位置決定の過程が二段階からなることの妥当性を中心に述べる。

◇2014 年 12 月 6 日（土）首都大学東京

・川下崇（首都大学東京・院）：旧本『老乞大』

の語彙語法

本発表では、古く朝鮮半島で用いられた漢語課本である旧本『老乞大』を取り上げ、そこに見られる語彙と語法とについて先行研究を踏まえながら考察を試みる。旧本『老乞大』は、その内容のほとんどが会話体の形式をとっているのであるが、全百六話中の第八十五話から第九十五話は非会話体の形式がとられている。この非会話体部分の異質性は先行研究でも指摘されており、後に挿入されたものとも言われている。本発表では、旧本『老乞大』の言語の性質を考えるために、先ずは非会話体部分を除いた上での会話体部分の言語の純粋性について考察する。

・落合守和（首都大学東京）:《大丈夫》の言語について

清代北京語の資料として，小説・満漢合璧課本・「正音」資料（太田辰夫 1950）に加え，裁判の供述・影絵芝居の脚本などが知られる。さらに，今から百年前，清末から民国初年の時期には，白話の報刊（『正宗愛国報』『京話日報』『小公報』，農商部『實業浅説』，北京市政府『市政通告』）・その連載（『説聊斎』系評書，小説『春阿氏』）・部隊の課本（『應用會話篇』）など様々な言語資料が存在する（展観：清民語料 1815-2014 参照）。これらと比較する現代の北京語資料として，ここでは 2014 年の中編小説『大丈夫』（李瀟・于淼著，2014 年 4 月，武漢：長江文藝出版社，共 23 章，349 頁）を採り上げたい。48 集連続テレビドラマの原作である。

・森広江（首都大学東京・院）：福清方言の音韻調査報告

『中国言語地図集』（1987）によれば、福清方言は福州方言に代表される閩語閩東区侯官片に分類される。福清方言の音系全体に関する先行研究は管見の限り馮愛珍『福清方言研究』（社会科学文献出版社、1993）しかなく、本発表では 2013 年に行った調査と馮 1993 との相違点（たとえば、馮 1993 では合流が指摘されていた秋韻と焼韻、輝韻と杯韻［韻目は『戚林八音』による］は調査では見られなかった）を中心に、福清方言の音系について調査報告を行い、福清方言の変遷、現状について考察する

・荒木典子（首都大学東京）:『満文金瓶梅』に見える漢文併記された語彙について

満文に繙訳された『金瓶梅』（『満文金瓶梅』）は、満洲語の本文のところどころに漢文が併記されている。人名、地名、官職名の他、一部の普通名詞や「歇后语」にも併記がある。寺村 2008:191 ではこの作品にみられる「歇后语」のうち約３分の２に漢文が併記されている理由について、繙訳者が満文のみでは理解しがたいと考えたから、と指摘している。漢文併記は当時の繙訳者の限界を示すのではないだろうか。本発表では特に普通名詞に注目し、併記される語彙の内訳、これらの語彙に対する満文繙訳の方式について報告し、当時の満洲族の漢語理解について検討する。

◆東海支部例会

◇2014 年 11 月 29 日（土）南山大学

・路浩宇（名古屋大学・院）：不定名詞句が主語となる受身文について

中国語の受身文では一般に定（definite）である受け手を表す名詞句が主語となり、不定（indefinite）である名詞句（以下 NP と呼ぶ）は主語とならない。このため“这/那个杯子被摔破了。”のような文が典型的な受身文として認められ、“一个杯子被摔破了。”のような文は成立しないとされている。ところが実際には数量詞を伴う不定 NP 主語を用いた受身文が観察される。本発表はこの受け手主語の機能について、いかなる場合に受身文の主語が不定表現なり得るのか、また不定 NP が主語となる受身文はどのような特徴を有するのかを明らかにし、不定 NP が主語となる受身文の語用的機能

および定的 NP が主語となる受身文との相違を分析していく。

・勝川裕子（名古屋大学）：＜不可能＞をどう表現するか―“不能 VR”と“V 不 R”を中心に

中国語では＜可能＞の事態は主に助動詞“会、能、可以”等を用いた形式、あるいは可能補語“V 得 R”を用いた形式で表現されるが、それぞれの用法が複雑に交錯しており、＜可能＞から＜蓋然性＞、＜不可能＞から＜禁止＞へと意味的にも広がりをみせる。また、肯定文と否定文では文法的機能が異なり、使用分布に不均衡が見られるなど、どの形式を用いて＜（不）可能＞を表すかは教学上においても難点となっている。本発表では、“不能 VR”と“V 不 R”を取り上げ、「できない」こと―即ち＜不可能＞がどのように言語化されるのか、その背景に如何なる表現意図が存在するのかについて、＜可能＞の事態に対する発話者認知の観点から考察していく。

・張国憲（中国社会科学院語言研究所）・盧建（名古屋大学教養教育院）：心理视角的定语表述倾向

按照认知语法的观点，意义是一种心理或认知现象。作为语言的构式表达，心理经验的各个层面都有映射为语言表达式相应意义的潜能。视角是人的一种存在体验，必然会映射到语言的构式层面，留下言者的认知印记。词语、语态、时体、指示词、语篇标记等的视角表述不言而喻。不过，汉语作为缺乏严格意义的形态语言，我们更倾向于将句法位置也视为重要的显性标记，关注句法位置对视角表述的选择限制。本文从认知介质、视角架构和语篇视野下的定语表述违约等三个方面讨论现代汉语不同句位的定语对心理视角的表述偏爱和识解感染。

・周錦樟（南山大学）：無気音と有気音の気流計測の試み

中国語の有気音を発する時には空気が多く流れ出すのに対して、無気音の場合は空気の流れが少ないと一般的に認識されている。それはともかくとして、６つの有気音の流れ出す空気量、並びに流れ出す瞬間の強さは、果たして同じものであろうか、そして、６つの無気音とそれぞれ対立している有気音との間の空気量及び強さの差はどのくらいあるかという疑問が残る。そこで、本研究は、iPhone・Android 端末で気象データを収集するために開発された「Shaka Weather Station」という簡易な風速計を使って、中国語の無気音と有気音の空気量及び強さの計測を試みた。

・時衛国（愛知教育大学）：「有点儿」「有些」の幾つかの用法について

「有点儿」「有些」は、少量を表わす程度副詞として「主語＋述語」というフレーズ・「述語＋目的語」というフレーズ・「動詞＋趨向動詞」というフレーズ・「動詞＋結果を表わす形容詞や動詞」というフレーズなどを修飾することもできるという点では、他の程度副詞「太」「极」「非常」「很」「十分」「相当」「特别」「比较」「格外」「稍微」「略微」「多少」などと大きく違っている。従来の研究ではこの意味機能についてはあまり記述されていない。「有点儿」「有些」はなぜ他の程度副詞には持っていない独特な意味機能を有しているのか、文法的にはどのような特色を持っているのか。本研究は二語の意味機能と文法的特徴について具体的な用例を分析することによって究明することとする。

◆関西支部例会

◇2014 年 6 月 28 日（土）大阪産業大学

・楊明（関西学院大学）：把構文にみられる目的語の交替現象

中国語の把構文には、[SUBJ-BA-OBJ1-V-RP-OBJ2]という統語構造を取り、「把」も述語も目的語を持ち、両者の目的語が交替できるというケースがある。本発表では、「V-

満」を述語とする場合を中心に、目的語交替のメカニズムについて説明を試みたいと思う。例えば、「李四把口红涂满了嘴唇」と「李四把嘴唇涂满了口红」のような場合である。二文の意味的な相違は、把構文レベルにおけるダイナミックな視点変動により、同じ概念的内容に対する捉え方が異なることに由来するものと考えられる。また、その交替メカニズムには、動詞と結果述語「満」の意味構造の特異性や＜図地反転＞による視点変動が密接に関わっているのである。

・古賀悠太郎（神戸女学院大学／神戸夙川学院大学非常勤）：日中両語のアスペクト形式の選択に関与する視点―ヴォイスとの相互関連性を念頭に置いて―

本発表では日中両語のアスペクト(A)形式の選択に「視点」がどのように関与するかを考察する。ただし，主な目標は，アスペクトのみならず，これと「ヴォイス(V)に関与する視点」（久野 1978，奥津 1983，古賀 2014 等）との相互関連性を見出し，「視点の体系」の構築（の第一歩）を試みることである。「V の視点」は事象の参与者のどちらをどのように眺めるかを問題とし，「A の視点」は事象そのものの眺め方を問題とするという点で，両者は質的に異なる。しかし，V・A ともに，日本語は＜視座＞重視，中国語は＜注視点＞重視という共通点も有するので，これを手掛かりとすることで，「視点」を活かした日中両語の V・A の体系化の可能性が生じるのである。

・矢放昭文・関光世（京都産業大学）：清末民国初期の英語知識と歐化語法

清末～民国初期間に華（中国）語を母語とする人々が著述・刊行した文献資料より、華英両言語の接触がもたらしたと考えられる華語の特徴を調査・整理し、その漢語史上の価値の一端を解明する。とくに阿片戦争（1840 年）以降、商業上の需要に応じて刊行された『華英通語』（1855 年）『英語集全』（1862 年）等「英粤対音資料」の英語音を標記する粤語字音の特質について述べるとともに、民国初期、すなわち五四文学運動時期の華語資料として徐志摩（1897-1931）の翻訳文を取り上げ、そこに現れた「歐化語法」について整理し、その具体像を明らかにする。前者については矢放、後者については関がそれぞれ発表する。

・秋谷裕幸（愛媛大学）：瑶族勉语中类似闽语和吴语的特点

Gordon Downer（1973）指出勉语中二等和四等同韵的现象与闽语一致。后来，Jerry Norman（1986）发现原始闽语中弱化声母在勉语读作浊音，并推测大多数弱化声母的早期形式是前鼻化塞音、塞擦音（prenasalized stops）。Jerry Norman（1991）则认为原始闽语和原始客家话中要构拟清鼻音和清流音，而在勉语以及越南语、泰语中存在着证实这个构拟的读音。本文在这些研究的基础上进一步探讨勉语中类似闽语以及吴语的音韵词汇特点，着重研究排他性较突出的几个特点，如“稻谷”、“左手”、“味淡”、臻摄开口三等见组的读音。进而讨论这些特点的来历。

・〈講演〉白一平（William H. Baxter，University of Michigan）：上古汉语：白一平、沙加尔的新构拟系统

近几年来，我跟沙加尔（Laurent SAGART）合作研究上古汉语，做出了一个新的构拟系统。我们不久将发表一本书介绍它（Baxter, William H., and Laurent Sagart. 2014. Old Chinese: a new reconstruction. New York: Oxford University Press）。本报告简单地解释我们用的新资料和方法，和我们的一些结果。以前学者比较少用的资料包括：（一）新出土文献里的先秦文字，（二）《切韵》系统不能解释的一些方言现象（如闽语的声母区别等），（三）苗瑶语、越南语、和侗泰语向汉语借来的一些早期借词。

◇2014 年 12 月 14 日（日）大阪産業大学

・金香（新潟大学・院）:“狗能咬人”は言えるのか―助動詞“能”、“会”の意味的相違点を中心に―

渡辺麗玲（2000）では好ましくない能力や習性を表す際には、“会”だけが用いられ、“能”を用いることはできないと指摘されている。例えば“狗会咬人”がこれに当たる。しかし、例えば“这只狗一次能咬很多人”のように個別的で独特な能力を強調する場合には、“狗能咬人”という反例も存在することが確認された。このような場合には、“能”は一定の能力を表す。さらに、数量詞と共起する場合には、能力が強いことを表すだけではなく、可能性の意味も含まれている。本研究では“狗咬人”のような例文を基礎にして、助動詞“能”と“会”が置き換えられる状況および、その理由を明らかにする。

・李梦迪（神戸市外国語大学・院）:“把…给VP”结构中的“给”的语义与功能分析

现代汉语中的“给”除了用作表示“给予”的动词、引领动作对象的介词之外，还可以在处置式和被动句中用如“把”和“被”，同时也可以与“把”、“被”共现，构成“把/被…给 VP”结构。（例如：张三把李四给打了。）按照语法化理论的“语意残留”原则，“把”字句中的“给”虽然虚化程度极高，但其原有的语义要素依然不可避免地有所残留，其原有的语义和用法依然会制约着虚化后的“给”的使用。本文通过描述“给”在“把”字句中的隐现情况来分析制约“给”的使用的语境因素，并从“给”的原型义入手，以“语意残留”原则为依据，分析该结构使用“给”的语义条件及“给”的表意功能。

・望月雄介（北京大学中文系修士課程修了）:現代中国語“吧”、“呢”及び現代日本語「ね」、「よ」における婉曲否定的機能

婉曲否定（negative euphemism）は婉曲表現の一種である。婉曲否定の否定とは論理学的な否定（negation）ではなく、語用論的な否定であり、会話中で現れる消極的意味の表現を指す。通常、婉曲否定表現は聞き手にマイナス評価、反対、疑い、拒否等の意を表す際に多く現れる。以上のような婉曲否定表現において、中国語語気詞“吧”、“呢”及び日本語助詞「ね」、「よ」は婉曲否定としての機能を果たしている。本発表では具体的な実例を挙げ、“吧”、“呢”、「ね」、「よ」の四語を比較し、各語が持つ婉曲否定的機能を分析する。さらに、各語が現れる位置、モダリティ、婉曲否定的機能の関連性についても分析する。

◆中国支部例会

◇2014 年 10 月 19 日（日）広島大学

・丁雷（島根大学）:对日本大学生汉语三音节声调中的 n+X+n 结构发音偏误的类型研究

一直以来我们都缺少针对日本大学生汉语三音节声调发音的专项测试。这主要是因为三音节声调的测试内容过于庞大，仅不含轻声的组合就已达 64 种，即使不算 3+3+n 和 n+3+3 的 7 种组合，那样还有 57 种。在一次测试中要测 57 种发音，从测试的效度和信度方面来看都是不现实的。为了填补这个二语习得研究的空白，本研究主张先将三音节简化为“含重复调”和“不含重复调”两大类，再选择相对容易的“含重复调”中的 n+X+n 结构，共 16 种组合进行测试。我们尝试将测试中发现的偏误进行归类，为今后的其他三音节声调发音测试建立偏误基本类型。同时，我们也在测试中着重观察“拼调能力”在调与调之间的“融合”过程中是如何调节发音的。

・犬塚優司（島根県立大学）:中国人留学生との会話と交流活動を中心とした授業の試み

島根県立大学総合政策学部では、第二外国語として中国語の授業が行われている。中国語の授業カリキュラムには、会話練習も組み込まれている。しかし、教室においては、学生と教員間、あるいは、学生と学生間の会話練習が行われるが、学生が中国

人と中国語で会話を交わす機会は大変少ない。また、本学には、中国人留学生 が多数在籍するが、中国語を学ぶ学生と中国人留学生との交流もあまり活発ではない。そこで、中国人留学生を教室に招き、中国人留学生との会話練習と交流を計画し、実践した。本発表では、授業の計画、準備、実践及び授業後の評価を紹介する。

◆九州支部例会

◇2014 年 12 月 6 日（土）: 熊本大学

・宮下尚子（熊本大学・非）：元曲元刊本における曾梗宕江摂入声字とその音価

中古音で入声韻尾-k を持つもの（曾梗宕江摂）のうち中原音韻の歌戈韻と蕭豪韻の双方に収録されるものについて、①元曲元刊本中の曲韻は口語音に傾き使われるのは韻尾を持つ口語音である、②入声韻尾について通説では消滅或は喉頭音化したとされるが、-k＞-i のように韻尾として体系的に作用している、③曲韻に用いられる入声字は中原音韻の収録項目より多く、元曲元刊本の用字（元代漢語の音韻体系）は入声字の音韻変化という点において規則的かつ保守的であることを論じる。早期の研究長田 1953、平山 1960 等では文言音の起源を南京方言との接触によるものと想定しており、それより早い時期に記録された『中原音韻』中の文言音の起源は今のところ不明。

・石亮亮（熊本大学・院）：『醒世姻縁伝』と『児女英雄伝』から見る「同素逆序詞」の使用実態

本文は明末清初の口語章回小説『醒世姻縁伝』と清末期の武俠小説、現代中国語の上限『児女英雄伝』に使用されている「同素逆序詞」への比較考察から、二つの小説に出る「同素逆序詞」の用法と意味について分析を行い、さらに、話し言葉と書き言葉の使い分けについて考察を進める。その結果、「同素逆序詞」は明清代どのように使用されるのかを提示し、用語の意味の「消亡」、「転換」と「保留」の実態や通時的変遷の一端を明らかにする。

・植田均（熊本大学）：关于近代汉语词汇语法的整理

明清时代代表性的近代汉语资料中，所有词语使用的用法共有几种？每一个词语的使用数量又是多少？并且要弄清楚每一章回里的出现数量。以此来弄清楚当时资料中词语的用法和数量究竟有多少？我们想首先研究清代北方官话的作品，然后研究清代南方官话。我们收集调查所有的词汇，同时根据意义为每一个词语分类。通过对这些近代汉语词语和现代汉语词语的比较，确认义项的扩大、缩小、消失，弄清楚同音词、同义词等问题。具体地用如下此 12 条来分析每一个词语。A<同音词> B<误刻问题> C<在现代普通话里意义缩小的词> D<同义词•近义词> E<词语已不被使用> F<方言词> G<书面语> H<与现代汉语词性不同> I<语序问题> J<词尾> K<修辞、语境问题> L<版本问题>。

・秋山淳（下関市立大学）：中国語の結果構文が表す意味

村尾(2006)によれば、(1)“John hammered the metal flat”のように、英語の結果構文は既に“S＋V＋O＋C”という構文が、「S が O を V することで C の状態にする」という目的語の状態変化（使役義）を表す構文であるという。一方、中国語の場合、たとえば、(2)“武松打死了老虎”や(3)“张三打累了李四”のように、動詞＋結果補語（以下 VR とする）の形式を用いた“S＋V＋R＋O”という構文を用いるが、(2)のように目的語の状態変化(使役義)を表すだけでなく、(3)のように主語の状態変化（非使役義）も表すことができる。本発表では、なぜ中国語の結果構文は使役義と非使役義の両方を表すことができるのかについて、考察するものである。

・陳陸琴（九州大学･院）：中国語と日本語「第三者の受身文」の対照研究―結果的影響に

ついて

本発表では中国語と日本語の対照研究を通して、結果的影響の視点から「第三者の受身文」について考察を行った。「第三者の受身文」の場合、受動者は、その事態に直接関わっていないため、間接的にでも、その事態から影響を受けている必要がある。これを本発表では「結果的影響」と呼ぶことにする。結果的影響の使用状況と現れ方に関しては、日本語であれ中国語であれ、いずれの受身文にも結果的影響が存在している。日本語では、結果的影響が明示される場合もあり、明示されない場合もある。それに対し、中国語の場合には、もっと複雑な条件がある。

・趙葵欣（福岡大学）：《法英华会话指南》的助动词系统—19世纪末汉语官话助动词系列研究之一

本文考察 *Langue Mandarine，Guide de la conversation français-anglais-chinois*（《法英华会话指南》，Séraphin Couvreur，1886）的助动词系统，主要得出以下结论：1.表意愿的动力模态（dynamic modality）在该书中主要用助动词“愿意”而不是“想”。表应该的道义模态（deontic modality）用“该当”，而“应该”未出现。2.“能、要”表达的模态跨越了动力、认识两个层级，显示了语法化过程伴随着主观化的进一步加强。3.“要”从动力模态＞认识模态（epistemic modality）>后模态用法（postmodal uses）“将来”的语法化轨迹与 van der Auwera and Plungian（1998）著名的情态语义地图一致；但“能够”、“愿意”发展出的后模态用法“祈使、劝诱”与西方语言有较大不同，而与日语有相似之处。文章还指出在该书中频繁使用的助动词“该当”的衰落及与“应该”的交替问题尚待研究。

・李孟娟（熊本大学·院）：“给”の含む受動表現の構文的特徴

本発表は、“给”の含む受動表現の構文的特徴ついて考察するものである。木村（1992）及び同氏の（2004）、（2008）、（2012）では、受動表現の成立には VR 構造（動詞 V+結果補語 R）が必要であると指摘する。実際にコーパスを利用し用例を分析した結果、R は結果的補語・状態的補語・補語が伴わないというさまざまな構造が存在することが分かる。それに、“被”構文と対照し、“被”は一部の残留目的語が容認できることに対し、“给”は残留目的語が容認できず、一種の直接目的語の受動化構文であることを論説する。

会則改正のお知らせ

■ 2014 年 11 月 15 日、大阪大学で開催された総会において、会則の改正が承認されました。

改正前	改正後
第 9 条［役員の任期］ ４．顧問を除く役員の年齢は就任時において満 68 歳を超えてはならない。	４．顧問を除く役員の年齢は就任時において満 63 歳を超えてはならない。

【改正理由】学会が大規模化し、業務も繁忙になっているので、会則上も激務に耐えられる年齢に引き下げるのが望ましいため。

内規改正のお知らせ

■ 2014 年 11 月 15 日、大阪大学で開催された評議会において、内規の改正が承認されました。

改正前	改正後
５．支部に関する内規（→第 17 条関連） （2）各支部は，旧年度の 2 月末日までに新年度の代表を選出する。代表は原則として評議員とする。	（2）各支部には必要に応じて支部例会世話人を置く。

【改定理由】これまで「支部例会世話人」についての定義がなく、明文化する必要があるため。

会議報告

■ **2014 年度第 2 回理事会**

日時：2014 年 11 月 14 日（金）17 時～20 時

場所：大阪大学言語文化研究科会議室

出席者：太田斎（会長）；遠藤光暁、小野秀樹*、木津祐子、平井和之、古川裕、楊凱栄（以上理事）；鈴木慎吾（ウェブリソース委員長）；紺野達也、竹越孝**（以上幹事）

* 編集委員長を兼ねる

** 大会運営委員長を兼ねる

欠席者：大西克也（副会長）；平田昌司（辞典編纂委員長）

■**2014 年度評議会**

日時：2014 年 11 月 15 日（土）10 時 30 分～12 時

場所：大阪大学全学教育推進機構 C-102 教室

出席者：構成員 43 名（定数 64 名）

■**2014 年度総会**

日時：2014 年 11 月 15 日（土）17 時～18 時

場所：大阪大学全学教育推進機構大講義室

【議長選出】

議長に鈴木慶夏会員（釧路公立大学）、丸尾誠会員（名古屋大学）を選出した。

【報告事項】

1. **一般報告**

1.1 会員動向（10 月 1 日現在）

竹越幹事より以下の報告があった。

・会員数：（2013 年 10 月 1 日から 1 年間の増減：住所不明者、年度末退会予定者を含む）

			増減
総会員数（賛助除く）		1202 名	＋3
（内訳）	顧問	5 名	±0
	名誉会員	24 名	－1
	通常会員	768 名	−29
	ネット会員	304 名	＋32
	団体会員	8 名	±0
	海外会員	93 名	+1
賛助会員		23 社	＋1

・〔昨年度除籍者〕29 名（国内会員 21 名 / 海外会員 8 名）［2013 年 1 月 17 日付］

・〔今年度除籍予定者〕39 名（国内会員 31 名 / 賛助会員 1 名 / 海外会員 7 名）

・〔ご逝去〕2 名（平井勝利名誉会員、羅漾明

会員）

＊ 会員動向については、直近の数字ではなく、4 月 1 日付の状況を春の理事会に、10 月 1 日の状況を秋の理事会に報告する。

＊ e-naf の管理者ページには、賛助会員およびダミーデータ 1 名および海外特別編集委員 4 名と国内寄贈会員 1 名を加えた合計 1231 名を「現在の会員数」として表示［10 月 1 日付］。

1.2. 支部例会関連

竹越幹事より以下の報告があった。

・過去一年間の実績は『中国語学』261 号「彙報」を参照。

・支部例会開催通知はメールに移行、ハガキ希望の方には郵送を継続している。

2. 編集委員会報告

小野委員長より以下の報告があった。

・『中国語学』261 号は、2014 年 10 月 31 日に 1,470 部を発行した。

・学会奨励賞受賞者として以下の 2 名を推薦した。

陳怡君氏（金沢大学大学院）「漢語南方方言指示代詞發展趨向試析——從地理分布及語法化角度的觀察」

蕭振豪氏（京都大学大学院）「“轻清重浊”重议：以诗律为中心」

・新旧委員の交代

任期満了：石村広、朱春躍、中川裕三、中西裕樹

再任：小野秀樹（理事枠）、沈力、佐々木勲人、松江崇

新任：秋谷裕幸、王亜新、島津幸子、橋本永貢子

3. ウェブリソース委員会報告

鈴木委員長より以下の報告があった。

・ウェブサイト更新等の通常業務を行った。

・今年度末で植屋委員が任期満了。後任は未定だが、委員会で発議する予定。

4. 大会運営委員会報告

竹越委員長より以下の報告があった。

（1）第 64 回全国大会審査結果

・応募総数は 96 件、締め切り後の到着や非会員・会費未納者からの応募といったケースはなかった。審査の結果、口頭発表 43 件（うち講評付き 6 件）、ポスター発表 17 件の計 60 件を採択することにした。不採択件数は 36 件。

（2）予稿集編集状況

・予稿集原稿の締め切りは 9 月 29 日（月）、大幅な遅延等のケースはなかった。

（3）託児室運営状況

・開催校の協力を得て託児室の利用者を募集したが、今回については希望者がいなかった。

（4）新旧委員の交代（2014 年度全国大会終了日の翌日より 2 年任期）

任期満了：竹越孝（旧委員長）、鈴木慎吾（2014 年度開催校選出）、遠藤雅裕、大西博子、丸尾誠、三木夏華、森宏子

再任：木津祐子（新委員長*，理事）、于康、更科慎一、朱継征

新任：吉川雅之（2015 年度開催校選出，1 年任期）、飯田真紀、石村広、鈴木慶夏、千葉謙悟、中西裕樹、宮本徹

* 新委員長の人事については 2014 年 5 月開催の第一回理事会で承認済み。

（5）第 66 回全国大会開催校の募集

・2016 年秋に開催予定の第 66 回全国大会につき、開催希望がある場合は年内をめどに大会運営委員会までご連絡をいただきたい。

5. 辞典編纂委員会報告

平田委員長より以下の報告があった。

（1）会議の開催

・2014 年 8 月 4 日（岩波書店）：平田・大西・小野・三宅の４名で、岩波書店側と実務的な協議を行った。
・9 月 28 日（岩波書店）：辞典編纂委員会

（2）現状および今後の日程について

・現在、原稿の査読・事務局チェック作業を継続中である。
・査読・確認を経た原稿を本年 9 月から出版社に逐次入稿開始しており、印刷所により、組版上の問題点を検討の上、年内に棒組ゲラの一部が出始める予定である。
・2015 年 3 月までに、全原稿の確定版を入稿する予定である。
・組版後、初校は岩波書店からいったん京都大学の事務局に集中して送られ、事務局において初校ゲラ執筆者あて発送、返送ゲラの受領、岩波書店への返送の業務をおこなう。事務の省力化のために、PDF のメール添付によってやりとりをおこなう場合がある。
・執筆者が校正を見る機会は、初校のみとなる。再校以後は事務局・辞典編纂委員会・協力者により作業をおこなう。
・不足項目が発見された場合は、適切な範囲内で項目を追加する。
・2016 年からは、項目をあいうえお順に並べたオーダー校による作業となり、ページ・行の変更ができない。索引作成の作業を本格的におこなう。
・2016 年秋の大会開催時の刊行をめざす。

（3）委員会経費について

・上記のとおり、初校ゲラを郵送（往復）する必要があるので、現在の委員会経費 120,000 円では不足する可能性がある。予算の増加をお認めいただきたい。

6. 次期大会開催校の決定

太田会長より東京大学駒場キャンパスにおいて 2015 年 10 月 31 日（土）・11 月 1 日（日）で開催する旨が正式に報告され、開催校の吉川雅之会員から挨拶があった。

7. 役員等の異動について

太田会長より編集委員会と大会運営委員会の委員交代が正式に報告された。

8. その他

太田会長から以下の報告があった。

・会員名簿の発行について

2014 年 10 月 31 日、1,300 部発行。

名簿発送に伴い、データの更新を要請する文書を添付した。

【審議事項】

1. 会則と内規の改正について

1.1. 会則の改正について

太田会長より役員の任期に関する会則の改正についての提案があり、承認された。詳細は本号「会則改正のお知らせ」を参照。

1.2. 内規の改正について

太田会長より支部に関する内規の改正についての提案があり、承認された。詳細は本号「内規改正のお知らせ」を参照。

2. 予算案・決算案

2.1. 2013 年度会計決算案（次頁資料参照）

千葉前年度幹事による報告・説明、及び荒木典子・張盛開会計監査による会計監査報告があり、報告の通り承認された。

2.2. 2015 年度会計予算案（同上）

紺野幹事による提案・説明があり、原案の通り承認された。

3. 名誉会員の推挙について

太田会長より佐藤晴彦会員を名誉会員に推挙したい旨の提案があり、原案の通り、可決された。

2013 年度会計決算書（2013 年 4 月～2014 年 3 月）　2014 年 11 月 15 日総会承認

＜収入＞（単位:円）	予算	決算
前年度繰越金	7,490,480	7,490,480
積立金	2,400,000	2,400,000
通常会員･海外会員会費収入	6,000,000	6,616,080
賛助会員会費収入	700,000	660,000
『中国語学』売上金	485,469	485,469
予稿集売上金	450,000	617,310
印税（著作権使用料）	21,000	21,000
通常貯金利子		987
満期貯金利子		9,590
早稲田大学学会事務補助金	50,000	49,805
別刷追加分料金		13,080
計	17,596,949	18,363,721

＜支出＞	予算	決算
会誌印刷費	2,800,000	1,519,085
予稿集印刷費	500,000	854,910
大会助成費	300,000	300,000
支部活動助成費	450,000	213,957
通信費	500,000	460,497
事務費	2,100,000	1,876,747
大会事務費	800,000	156,904
学会連合等年会費	42,000	42,000
事務局費	350,000	350,000
編集委員会経費	120,000	120,000
ウェブリソース委員会経費	120,000	75,140
ホームページ関連経費	180,000	76,000
大会運営委員会経費	220,000	176,000
旅費交通費	750,000	519,000
会議費等雑費	180,000	138,947
学会奨励賞	100,000	0
選挙関連経費	100,000	42,000
積立金	2,440,000	2,440,000

［内訳］

記念大会積立金（26 万）

事務委託関係積立金（118 万）

ウェブサイト構築積立金（50 万）

国際会議開催支援積立金（50 万）

予備費	5,544,949	8,979,936
計	17,569,949	18,363,721

監査の結果、経理内容は適正であり、経理諸表は適確に処理されていることを認めます。

2014 年 7 月 12 日

2012 年度会計監査　張　盛開

2012 年度会計監査　荒木典子

2015 年度会計予算案（2015 年 4 月～2016 年 3 月）

2014 年 11 月 15 日総会承認

（単位:円）

＜収入＞	
前年度繰越金	3,272,139
積立からの繰入金	2,480,000
通常会員会費収入	6,500,000
賛助会員会費収入	690,000
『中国語学』売上金	400,000
予稿集売上金	450,000
計	13,792,139

＜支出＞	
会誌印刷費	2,300,000
予稿集印刷費	500,000
大会助成費	300,000
支部活動助成費	450,000
通信費	500,000
事務費	2,000,000
大会事務費	300,000
学会連合等年会費	42,000
事務局費	350,000
編集委員会経費	120,000
ウェブリソース委員会経費	120,000
ホームページ関連経費	180,000
大会運営委員会経費	200,000
辞典編纂委員会経費	180,000
旅費交通費	600,000
会議費等雑費	180,000
学会奨励賞	100,000
選挙関連費	100,000
積立金	2,520,000

［内訳］	
記念大会積立金（30 万）	
事務委託関係積立金（122 万）	
ウェブサイト構築等積立金（50 万）	
国際会議開催支援積立金（50 万）	
予備費	2,750,139
計	13,792,139

例会および全国大会開催のお知らせ

今年度の例会実施予定

各支部の今後の例会実施予定は次のようになっております。

北海道支部：2015 年 3 月

北陸支部：2015 年 2 月

支部例会の発表者、参会者ともに歓迎いたします。発表者の方には発表要旨（300 字以内）の事前提出をお願いしております。この要旨は、学会ウェブサイト上の例会案内のページで紹介し、年に 2 回発行の学会ニューズレターにも掲載されます（頁数の関係で掲載できない場合もあります）。

なお、開催予定は変更になることがありますので、詳細は各支部例会世話人までお問い合わせ下さい。担当者の連絡先は、学会ウェブサイトをご参照ください。

（事務局）

第 65 回全国大会開催のお知らせ

日本中国語学会第 65 回全国大会は、2015 年 10 月 31 日（土）、11 月 1 日（日）に東京大学（駒場キャンパス）にて開催されます。ワークショップの応募要項は 2014 年 12 月末までに、また一般研究発表の応募要項は 2015 年 4 月初旬までに学会ウェブサイトに掲載される予定です。

（第 65 回全国大会準備会）

事務局からのお知らせ

■ 会費未納による除籍者

（「会費納入に関する内規」による）

〈計 39 名、ニューズレターのウェブ公開にあたり実名を省略した〉

■ 退会について

退会は会費納付が前提となっています。退会ご希望の方は必ず会費納付後の年度内にお申し出ください。

■ 住所不明の会員

〈ニューズレターのウェブ公開にあたり実名を省略した〉

■ 2014 年度会費納入のお願い

会費未納の方には、11月に振込用紙を同封して納入依頼のご連絡をお送りしました。年会費（一般会員6,000円、ネット会員5,000円）を最寄りの郵便局からお振込下さい。速やかにご入金くださいますよう、御協力をお願いします。

郵便振替　加入者名：日本中国語学会

口座番号：00980-6-282216

■ 顧問・名誉会員の推挙

顧問・名誉会員のご推挙は、推薦文を添えて2015年9月30日までに事務局宛にお願いします。

■ 予稿集の販売

過去の大会予稿集は好文出版にてお求めになれます。第61回までは1500円、それ以降は2000円となっております。詳しくは学会ウェブサイトをご覧下さい。在庫につきましては好文出版（order@kohbun.co.jp）に直接お問い合わせください。

■ 事務局の連絡先

各会員の登録情報は、学会ウェブサイト（http://www.chilin.jp/）内の e-naf（オンライン会員情報管理システム）から、会員ご自身でログインして確認と更新ができます。事務局への問合せは、学会ウェブサイトの「お問い合わせ」ページをご利用ください。

事務局への郵便物は、

〒651-2187

神戸市西区学園東町9-1

神戸市外国語大学中国学科内

日本中国語学会事務局　宛

までお願いします。

日本中国語学会々報　2014 年秋季
（年二回発行）
発行者：日本中国語学会事務局
〒651-2187 神戸市西区学園東町 9-1
神戸市外国語大学　中国学科内
E-mail: jimukyok@chilin.jp
URL: http://www.chilin.jp/
発行日：2014 年 12 月 25 日